

日本の都市農地、これまでとこれから

話し手：福井県立大学長 進士五十八氏

聞き手：(一財)都市農地活用支援センター常務理事 佐藤啓二



これまでの歩みと福井県

●佐藤

本日はお忙しい中、お時間をとっていただきありがとうございます。

東京農大の学長もされた進士先生が2016年4月から福井県立大学の学長に就任なされた時にはビックリしました。改めて先生の福井県とのご縁、県立大学長としてのお仕事などお話し下さい。

●進士

私は昭和19年(1944年)京都紫野の船岡山近くで出生、空襲の恐れがあった田舎に行けといわれて親のゆかりの福井県に疎開、今は鯖江市の吉川村で小学校時代を過ごしました。

私の原風景は日野川と田園豊かな越前の水田風景です。

それ以後、東京都江東区で長兄がニット工場を営んでおりましたので、木場近く深川の元加賀小学校に転校、深川第六中学校を経て、親友と共に東京都立化学工業高校工業化学科に進み、卒業後、呉羽化学株式会社東京研究所に入社しました。物性班の化学実験に明け暮れる毎日でしたが、実験中の事故で

視力が大きく低下、また研究所の高学歴社会や当時の高分子化学界に自分の居場所はないと感じていたこともあって、好きな絵心が生かせそうな造園家になろうと、東京農業大学農学部造園学科に入学、造園家への道を歩み始めたのです。

農大助手になって間もなく東尋坊の景観対策と修景デザイン、学長時代には足羽川の激特事業委員長という具合で福井県とのご縁をいただきました。私の紫綬褒章受章パーティに来てくれた首長で、一番遠くから駆けつけて下さったのが福井県の知事でしたし、福井は私の第2のふるさとだと思ってきました。

そんなことで、農大退職後の2013年、福井県里山里海湖研究所長を委嘱され、翌年には県立大学の客員教授になりました。実は、名古屋市で開かれた生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)で環境省が世界に提案することにした「SATOYAMAイニシアティブ」の政府方針案を私が委員長でまとめたこともあり、その推進のために自治体の参加を求めた国際パートナーシップ会合(IPSI-4)を福井県が開きその機に「福井県里山里海湖研究所」が開所したからです。

「里」は人の暮らす場所、日本の里地里山での人間と自然の共生文化は世界の範となれます。今も里山里海湖研究所長を兼務していますが研究所は県民参加型で元気です。

●佐藤

進士先生の仕事にかける底知れぬエネルギーはどこから来るのですか。福井でも多方面に力を発揮されているわけですが。

先頃の日本農学アカデミー会報23号(2019)の「地方公立大学の小さなチャレンジ」と題した大学

改革、即ち「食農環境も体得し創造的人生を目指す者を育てる“創造農学科”の新設」は、日本の農業のあり方を考える上大変興味深い内容でしたね。

●進士

何よりも危機感です。地方創生が本気でなければ大変になる。福井県立大学はルーツから2020年で実は百年。短大を経て30年前に四大化。生物資源、海洋生物資源、経済、看護福祉学部、学教センターの実質5学部の公立総合大学。学生、大学院生の総数1,800名の少人数教育をモットーとするコンパクトな大学です。

2016年4月に第五代学長に就任した私は半年で、旧帝大、地方国立大、大都市私大とは異なる地方の公立大学に求められるミッション提示。「県立大学は福井県の持続可能性を支える大学でありたい。」とし、その具体化を「オープンユニバーシティへの3つ構想」で大学運営の基本としました。

①キャンパスへ県民の庭。

②県民の学びの場と機会の提供。

③県内諸団体、専門家とのネットワーキング、その拠点・プラットフォームとなる。

この方針に沿いキャンパスへの桜や果樹の記念植樹、施設の開放、市民も利用できる県大レストランへ改造、公開講座数の大幅充実、ブックレット「福井学」シリーズ刊行等を実施。



県内諸団体とのネットワーキング

県内専門家とのネットワーキングを前提に、2020年4月生物資源学部に「創造農学科」を新設。農牧場主、アグリビジネス、AI専門家、試験場研究員、全県各地の郷土料理家など「食と農と環境」を

つなぐ実務家50名を「特任講師」に委嘱。学びのフィールドも農牧場の実務現場。動植物、微生物の全てを体験する「農のゼネラリスト教育」。これは日本初と自負しています。

一方専任教授陣は新品種作出のスペシャリストに特化させています。

「農学栄えて農業減ぶ」と言われないように、本来農業者の原点「百姓」はトータルマンであり体験であることを銘記すべき。現代っ子には入り口は食、地元の精進料理、報恩講の郷土食まで体験する。次のステップが食材生産の農業。オーガニックもAI農業も。そして水土環境にまで目を開く。食農環境創造学科のチャレンジです。

「農」のあるランドスケープ

●佐藤

私どもの都市農地活用支援センターでは、平成25年度から、農林水産省都市農業室からの交付金で、都市住民・企業・団体が行う、都市農地の多面的機能発揮の取組を支援する専門家派遣事業をこれまでに1,414件実施してきましたが、多様な農の取組がどんどん広がっています。

●進士

農的空間が素晴らしいのは、オーガニックでバイオロジカル。近代科学技術と人工都市文明が機能性、合理性、効率性本位の都市化を過度に進めた。生き物からの発想や安らぎはそこにはない。

都市建築は無機質なガラスとアルミでメカニカル。ビルはどんどん垂直に伸びて人々にテクノストレスを与えます。

人間も生き物。生物が生きていられる環境を私は「安定環境論」「安定空間論」「安定景観論」で展開しています。例えば18±3℃が温度の「安定域」です。ヒートアイランドの緩和、都市洪水の防止には「グリーンミニマム（自然面率）50%」が私の提案。

農業は畜産と作物の共生が基本です。家畜からの尿尿が元肥料で作物を育てる。循環共生がサステイナブルな生命活動で、「農」の原理はすべて「生物からの発想」です。

「農」のあるランドスケープは人間の原風景であり、人の身体と精神に安定を与えてくれる。

都市住民の間でさえ「農」的活動を希求する市民活動が増えているのは、生物的人間の発露、生命と環境は不可欠のテーマです。



六本木ヒルズ屋上庭園

●佐藤

一昨年、練馬区で世界各都市の行政担当者による「世界都市農業サミット」が開かれ、私も傍聴させてもらいました。そのテーマが「貧困をなくす」、「障がい者雇用」、「社会更生」、「健康で安全な食料」、「資源循環」、「異なった民族・階層のコミュニティづくり」などと多岐にわたっていることは大変印象的でした。日本でも同じ動きと新しい潮流が生まれていると感じました。

●進士

アメリカの心理学者マズローの「欲求段階説」では、①生理的欲求、②安定欲求、③社会的欲求、④自我欲求、⑤自己実現欲求といわれ、究極は哲学的欲求、「アートや美に至る」のです。

「農」への要求も、近年市民の「農」的活動への志向もマズローの段階説で説明できる。

アメリカのコミュニティガーデン運動の初期は、低所得者層の「飢餓からの解放」「就労訓練」や「安心・安全な食料確保」などに根差した側面がありました。次で、大都会の「群衆の中の孤独」の市民たちが菜園で土を介して仲間が持つこと、やがてクラインガルテナーの指導者として尊敬されたり、援農など人助けボランティア活動で自己実現を果たすようになる。

私は『グリーン・エコライフ』（小学館、2010年）で、都心から農山村までの広大な国土の自然環境の違いを利用して、多彩な「農と自然」とのつきあい方、そのことで心身ともに健康なライフスタイルを実現してほしいと提案してきました。農の多面的機能を楽しむためには都市民・農民も「農」との共生関係を適宜チョイスして、例えば「精農」「楽農」「援農」「遊農」「学農」など。

これまでの農水政策は「精農」本位で生産第一の発想です。だから都市農地の保全是二の次。従来の農地法的な堅苦しい概念を変える必要があります。フィールドも都心の公園・街路、企業緑地、宅地、地表からビルの壁面、屋上緑地まで。市民農園、区民農園、学校農園から郊外の生産緑地まで、あらゆる生活空間に広げるべきです。

生産のためだけの「農業」、生産手段としてだけの「農地」、ただ昨年と同じ繰り返しの農業をするだけ、他所の人は歓迎しない「農村」、合理主義のプレハブやハウスが支配する「美しくない農村」、これらイメージを逆転して豊かな地域文化と創造、多自然居住の舞台となるルーラル・ライフを創出したい。都市内の小規模農地でもそのミニ版は可能です。

都市農地のこれからは

“都市との対比”、“アートとの共生”

●佐藤

今回の当センターの定期講演会で進士先生がお話しいただく基調講演そのタイトルは「これからの都市農地活用の視点“都市との対比”、“アートとの共生”」ですが、お話のポイントをお聞かせください。

●進士

第一に、なぜ都市で、農地か。私の本に『都市になぜ農地が必要か』（実教出版 1996年）がありますが、人工巨大超高層過密都市病理から人々の健康を守るにはその対極にある「農」で救うしかない。豊かな市民は、まちがいなく美やアートに強い関心と憧憬を持っている。拙著『日本の庭園—造景の技とところ』（中公新書 2005年）では、美しくなければ造園でないと書きました。建築は用（実用）と美、土木では用強美。造園では用と景。美を求める

「景」のデザインには「自然共生」、「環境共生」、「地域共生」の3つの共生が大切で、日本の農業農村社会の景観づくりを拙著『ルーラル・ランドスケープ・デザインの手法』（学芸出版社 1994年）、を提案していますが、日本の自然風土と調和した「農」のデザインは21世紀の環境モデルではないでしょうか。

日本の自然共生文化のすばらしさは自然を人間と対立させる西欧的価値観と違い、日本では自然も人の仲間なのです。レヴィ＝ストロースの『野生の思考』が人々は野生の生き物の役立つ点を見つけ出してそこに名前を付けてきたと記している。日本人は科学時代の今日でも自然と上手に付き合っている。その最たるものが「農」の地域や場所には有る。

日本の農地・農村風景、ルーラル・ランドスケープの価値は、メカニカルで無機質な現代オフィスビルと「農」や「緑」、「生き物」を対比（コントラスト）すると実感できます。

国内外で広がる「農」的活動の舞台は、ルーラル・ランドスケープ・デザインという手法。たとえば「農」を地（背景）に、「建物やアート」を図（点景）に、構成すると「美しく見える」化できるのです。むしろ、それが都市の魅力も倍増するでしょう。

「クルックフィールズ」と「美麗農村」

●佐藤

ご講演で言及される「クルックフィールズ」（木更津）や先生が中国で進めておられる「美麗農村」についてご紹介ください。

●進士

クルックフィールズは、千葉の木更津郊外にあるMr.childrenで知られる著名な音楽家小林武史氏がオーナーで実現された食・農・自然がテーマのファームパーク。自由や豊かさを本気で追究する「次の世代にも持続する健康的で美しく創造的なファームランド」プロジェクト。アーティストの素晴らしく純粋な、人間いかに生きるべきかの問いと自覚、理想的行動がクルックフィールズと言えるでしょう。

クルックフィールズは、オーナーの小林氏の強い思いに従い、木更津郊外の約30haの畑地を使って、

有機農業や平飼い養鶏、家畜尿の堆肥、バイオフィルター、太陽光発電などを取り入れ、穫れた作物や加工品をレストランで食べたり、土産を買えたり、宿泊して体験したりする「環境共生で持続可能なファームランド」。さらにパーク各部にはコンテンポラリーアートや著名な実力派建築家のユニークな建築を配しており私の提唱するルーラル・ランドスケープ・デザインの考え方も共通しています。

私はワタリウム美術館「庭園倶楽部」の企画主宰「新時代の都市とランドスケープ」でクルックフィールズの小林さんと対談しました。私が以前から言ってきたアメニティデザインやRLDを実現しているクルックフィールズを応援したいし、先述した福井県立大学の創造農学科フィールドワーク実習の学生を派遣する計画もすすめています。

次に中国の話。中国風景園林学会の大会でキーノートを頼まれたり、成都の「美麗農村」プロジェクトにアドバイスもしています。中国では習近平主席が国家目標として「美麗中国」を打ち出し、その一部として「美麗農村」もすすめています。その中で、重慶大学建築学科OBの設計事務所「朗基」と県立大学が協定を結び、教員や学生の相互交流を決めています（コロナで未実施）。

●佐藤

そういえば先生からお送りいただいたパワポに中国での写真がありましたね。



中国風景園林学会大会での基調講演

●進士

2,000人聴衆がいたのは中国風景園林学会大会での基調講演、もう一つは成都市の「朗基公司」での

プロジェクトです。美麗農村の一角には、「農」のアートや広々とした緑地、伝統建築のレストランもあります。全体として農村系リゾートですね。

「農」を取り入れた都市公園

●佐藤

ところで都市農地を利用した市民農園、農業公園等を計画するに当たってどのような視点を持つべきか、また今後都市公園は都市住民の「農」的活動ニーズにどうこたえるべきでしょうか。

●進士

都市地域で産業として露地農業を成立させるのは容易ではありません。農家は農地保全の担い手で、一部農地を提供し、都市住民の体験農園として趣味の多品目栽培の場とすることにする。およそ「市民農園」や「学校農園」は都市農地利用の有力なメニューだと考えます。

都市農地は、農業生産用地としての価値で考えてはいけない。横浜にある生糸の豪商原三溪が創った本牧の三溪園は、広大な池や山林の庭園に茶室を配し、横山大観など日本画家に画室を提供した名園ですが、実は原地所がその周辺に整備した高級住宅地分譲の目玉施設でもありました。

市民農園も同じです。アートが似合う美しい農地風景を造ることも必要です。

クックフィールドは郊外ですが、周りに郊外住宅地を計画すれば、別荘としても素晴らしく個性でしょう。

身の回りにあるこれまでの区民農園は、段ボールやビニールのひもで小面積を囲った安っぽいのがふつう。私は 92 年から数年間東京都の「TAMA らいふ 21」事業で、あきる野市や三鷹市、小平市などに「ファーマーズセンター」をすすめました。そのモデルとしてドイツの各地のクラインガルテンに関係者を案内しました。生け垣などで美しく区画された 100 坪以上の個々の区画内には、ラウベや花壇やピクニック芝生地、周辺には果樹。シャワー室や食堂、談話室、イベント空間を設けたおしゃれな「クラブハウス」も。世田谷区役所都市農地課の依頼で私が計画した「砧クラインガルテン」はそれら

がモデルです。

これまでの都市公園は、その必要性が十分認知されず守りの管理姿勢が長く続いています。平凡なデザイン、画一的な管理で「農的利用」など、多様化する市民ニーズに答えられてはいない。日本で公園というとワンパターンの「児童公園」のイメージが付きまとい固定的にとらえてしまっていますが、本来、公園ほど自由度（裁量の幅）の大きい都市計画施設はない。公園のテーマはいろいろあってよいわけです。市民農園や農業公園など、農への市民ニーズの多様化・増大の受け皿として従来の分区園を超えるエディブルフラワーやハーブなど美しく修景されたり、アートを配置した新しい公園がこれからは登場して欲しいですね。



砧クラインガルテン（世田谷区）

ポスト 2022 年の都市農地政策

●佐藤

最近の都市農地・都市農業制度に関連した話になりますが、都市農地の減少が続く中、2015 年に「都市農業振興基本法」が制定され、翌年、都市農業振興基本計画が閣議決定され、農地はこれまでの「宅地化すべきもの」という位置づけから「都市にあるべきもの」へと政策転換が目指されました。その後、いわゆる生産緑地の 2022 年問題への対処の必要性などから生産緑地法等の法改正が行われ、現在、2022 年中の特定生産緑地への移行に向け第一線では大忙しです。

都市農家や行政等の努力によって 2022 年に買取り申し出期限が到来する生産緑地の内の相当部分が特定生産緑地に移行する見通しですが、やはり減

少傾向に歯止めをかけることはできません。また、他の農業者等への貸借を行いやすくするため、農水省が創設した「都市農地貸借円滑化法」も徐々に利用が増えているものの全体からすると僅かなものです。

一方、一昨年の練馬区主催「世界都市農業サミット」で各国の都市住民・企業・団体による農的活動の広がりが報告されたように、我が国でも市民の農的活動への取組とニーズが広がっています。しかし国の政策の動きを見れば大きな山を越え、都市農地保全、都市農業振興への熱は冷めつつあるのではないかと危惧されます。

ポスト 2022 年、これまでの都市農地保全・都市農業振興政策の基礎の上に、より広範な都市住民・企業・団体のニーズに応える新たな政策展開が求められているのではないのでしょうか。今回の土地月間のテーマ「『農』が創造する都市の新しい魅力」にはそのような思いを込めております。

●進士

そもそも、平成 3 年の生産緑地法改正と大都市圏での宅地並み課税の強行は、戦後復興で急速に進む都市化と公共投資の効率化を目的に昭和 43 年に「線引き」という乱暴な都市計画手法を導入したものの農地所有者らの反対に対応できず、また市街化区域に線引きしたエリアであっても基盤整備がなされず多くの農地が残存したことを強制的に宅地に転用させようとした愚策であったとも言えます。

第一に、代々営農に励んできた農民の農地への深い思いへの理解が不十分で、都市計画事業の効率化だけを指して一瞬に農家を二分する「線引き」がスムーズに進められると予想したのは浅すぎ。第二に、市民生活における「農」の意義やオープンスペースの重大性を過小評価していたこと。第三に、自説で恐縮ですが、本来生物である人間の居住環境と土地利用計画は経済効率だけでなく、その土地に刻まれた農業用水網や田舎道の並木など文化的景観を生かしてこそ、本物の魅力ある都市計画となるのだという「アメニティの本質」への理解の欠如を指摘したいと思います。もちろん地域特性に応じてはありますが、農水省、国交省が共に理解を深めて

「都市と農の共生」こそ人間都市の基本であり、魅力的環境こそが 21 世紀都市の死命を制すると考えてほしいと強く思います。

次のステップを考えると、農地を都市緑地法の対象となる緑地を含めた都市緑地法改正こそ正しい。アフターコロナ。ポスト 2022 年は本当に「農の時代」です。

およそ、地球温暖化と気候変動、生物多様性の地球社会最大の課題を抱えるこれから、高層ビルの建設だけで「魅力都市・人間都市」が可能だと考える識者はいないでしょう。

かねて私は「20 世紀は農村を都市化した時代。21 世紀は都市を農村化する時代」を標榜、『農の時代』（学芸出版社 2003 年）を強調してきました。相変わらず計画行政家やデベロッパーは、“緑地や農地”の本質的重要性への認識が足りないようです。

しかし、コロナ禍下の現象に顕著だが、今や都市住民が最も“緑農地ーオープンスペース”の本質的意義を理解し、反応しています。ビルの外構としてただ緑化し、夜間は停止するような死水の水景、ホンコンフラワーで装飾する等のフェイク・ネイチュアには騙されない人々が増えているのです。地価の高い渋谷区が区立の市民農園を開設したり、高額な会員制ファームが成立している東京人たちの本当の叫びを理解しなければ、本当に求められる魅力都市は造れない。日本の持続可能性は私風に言えば「1 億総 5 種兼業農家」。そのフィールドは、都心から郊外、テレワークとマルチハビテーションの時代のこれからは、日本列島の地方都市や里地里山里海湖地帯も対象となるでしょう。

こうした「農」による環境福祉がこれからの国民福祉の羅針盤となるだろうと思います。

●佐藤

本日はお忙しい中、どうもありがとうございました。